

# HANDICRAFT

## 朝日新聞で紹介されたティナラク織

相田、九島、山崎が、フィリピンの手織り物産業の研究者である小瀬木えりの大阪国際大学准教授の紹介で、朝日新聞生活グループの帯金記者の取材を受けました。それが

### フィリピンの工芸 和装に

### 伝統の手編み・織物、帯に変身

という7/13付新聞の見出しの記事になりました。

反響としては3件の問い合わせをいただきました。これから各種イベントで活用して多くの市民に関心を持っていただき、COWHED 組合員の収入向上に結びつけばよいと思います。

以下新聞記事の写真と内容の一部抜粋です。



(写真の織り手はリアさん)

フィリピンの農村や少数民族の伝統工芸を生かした和装品の製品が売り出されている。取り組んでいるのは日本の研究者や NPO。手仕事のよさが理解されやすい和装に取り入れることで、現地の伝統を守りつつ、自立につなげる支援を目指している。(帯金真弓)

.....

ミンダナオ島の先住民を支援する NPO「ビラーンの医療と自立を支える会」も、昨年チボリ族に伝わるアバカのティナラク織を帯地として誉田屋に納める。「夢のお告げを織り込む」とされ、草木染の黒や赤と生成りを組み合わせた柄が特徴だ。完成まで3カ月かかる。

入植政策などで土地を追われたチボリ族はやせた土地で産業を営んでおり、多くが貧困ライン未満の生活を送っているという。

.....

## 「伝統の家」で織り手たちと

相田陽子

5月30日 COWHED を訪ねた。織り手のことを知りたいという小瀬木先生の要望で、織り手たちへのインタビューが訪問目的の一つだった。

53歳のヒルダ、47歳のシーラ、35歳のリアが待っていてくれた。ヒルダとシーラが子どもの時は近くに学校がなく、1998年に始まった識字教室に参加して、読み書きができるようになった。リアは小学2年終了である。

3人とも織り手である母親から10代半ばから教わっている。そして娘たちにも12歳位から教え始めた。リアの娘は12歳。去年糸結びを覚えた。近所の織り手が急ぎの注文を受けると、短期間で糸結びをする必要があるのですが、糸結びができればお小遣いももらえるからである。3人とも夫の収入が少ないので、織の収入が家計を支えており、伝統を受け継ぐというより、家族を養うために必死で織っている。

「伝統の家」には実演用のティナラク織の腰機が設置されており、体験させてもらった。腰当てを当て、足を伸ばして座る位置を決める。糸がピンと張っていないなければならない。しかし杼(ヨコ糸が巻きである細長い物)を通す時は、足を緩め、上体も少し前かがみにして、タテ糸の間に間隔を作らなければならない。まさに体を使って織るのだとわかった。織り手が織るのを見ていた時は、手だけが動いて、そのような動作をしているとは気づかなかった。最小限の動きでリズムカルに行っているからだろう。私の動きは不恰好で、恥ずかしくてすぐに止めた。リアは腰当ての位置に傷があるのを見せてくれた。

模様を作る為の糸括りは、図面もないのにどのようにやるのか、今もってわからない。神業のような技術で、美しいティナラク織を作り出す織り手が十分な報酬を得ているとは言えない。私たちが販売促進に努めると同時に、買値をあげる努力をCOWHEDと相談する必要があるだろう。

☆イベントでお会いしましょう ☆  
下記に出店の予定です(詳細 P6)

8月17日: そら祭り  
10月4-5日: グローバルフェスタ JAPAN2008  
10月12日: みどり多文化フェスタ